

マルメロに目鼻のつく話

泉鏡花作

一

私の知己に、兄さんは或美術學校の教授で、弟君は陸軍の中尉なのがある。中尉がまことに不可思議な事實だと言つて、いつもよく此の話をする。

幾度も聞いて居るので、順序も大概極つて居るから、お取次が出来る。處で乾三・・・乾の乾三、それにも及ぶまいけれども音讀ではいくらかも同じいのであるから申して置く。中尉が此の話をするのに、なかへ出る娘を、いつでも屹と白百合に譬へる。けれども純白なのではない、鹿子のあるので、娘は色が白く、きめ細かに、ふつくりして甘く薫つたと言ふのである。歌人が詩人だと、何とか斬新な品さだめもあらう。妙齡の娘を百合の花では餘りつい通りだが、軍人の見立だからまあ其處らかも知れない。

此の折に中尉が恚う言ふ。――

「で、其の百合の花は、丁度唯今申上げますお話の起る頃に、或邸の庭に――別に花壇と言ふ設もなしに――草の中にすつきりと莖長く一輪大きく咲いて居たのを見ました。が何うしても其の娘にそつくりな氣がして成らないのです。石燈籠がありました。根を、まだ穂の出ない絲薄がすら／＼包んだ中に、恚う少し俯向いて咲いたのは、大な結綿を結つた姿そのまゝです。其の上に紅い帶をしめさしたら寸分違はないと言つて可いくらゐです。

立派な邸で、庭も背戸も小兒が一廻りするには草臥れるほど廣うございました。昔、三千石取の武士の住まつた邸ださうで、僕がうまれました町内の氏の神の杜の奥に、森と生垣に包まれて別に一廓に成つて居たのですが、此のお話の頃は、第××師團の某少將の住居だつたんです。僕が軍籍に就きました頃、閣下は最う豫備に成つて居られて、今頃は何うされたか分りません。

何しろ多年經ちますから。

閣下にも男の兒があつて、其が遊び友だちだつた
ものですから、時々奥庭まで入りました。

然うです……其の百合の花は、奥庭に咲い
て居たのです。向つて廻縁の高いのがあつて、それ
に五六壇の廣い階がついて居ました。朱塗です。

小兒は荒いから、邸では警戒して、不斷は奥庭へ
は入れないのに、其の時は何う言ふ拍子か、ごむ鞠
のやうに發奮み込んだものなんです。

僕の内なぞ、職人の町家には、地方でも餘り庭は
ありません。瓦鉢の松葉牡丹、缺摺鉢に植ゑた鬼百
合の、あの眞紅なのさへ土から生えたのを直接に見
るのは珍しいんですから、石燈籠に薄をあしらつた
中に、脊のすらりとした白いのが咲いた形は草双紙
か、錦繪の景色を其のまゝに見るやうで、不思議と
思つたくらゐでした。

其の時、階に腰を掛けて、白髪しらがの總髪そうはつのお爺さんおぢい
が一人居ひとりゐました。

餘程の高齡です。海綿にしきのしを當てたやうな、
少々角ばつた黄色い顔がぶく／＼して居る。夏でも
白足袋を穿いて――此の時は秋でしたが――
■色に薄光のある綿を噴いたおさすりを着て、い
つも羽織なしで、一寸二寸づゝ這ふやうに摺足をし
ます。結付草履で、門内から神社の境内、邸の居ま
はりを生垣とすれ／＼に、撞木杖を兩手に支いて一
歩づゝよた／＼と歩行いて居るのを遊 夥間はよく
見掛けました。

何うかすると、其の體で、前町までも出て來るの
ですが、小兒たちから見ると、年齢と言ふより、餘
り時代が違ふ人の故か形が其のためか、近くに居て
も、づつと離れた處に立つた老人らしくて、其の歩
行くのが、道の方が動いて、づゝと寄つて來るやう
で、地の底か、墓の穴からでも、ぽつと顯れたと言
ふ様子です。が、少將の御隠居と言ふために威があ
つて位の備はつたゞけに、雲から下りて來るやうに
思はれて、何となく尊く思はれるにつけても、小兒
たちには可恐かつたのです。

―― 此の老人は本間家の御隠居、少將閣下の
父上なんですが、晝間、寂しい時、杜の中や、黄昏
の町で、ふと其の薄蒼い着ものを着た、眞白な總髪
を視ると、音に聞く・・・天狗が假の形を顯し
たかと思ふばかりだったのです。

いつも苦切つた澁い顔して、何を視るともなしに、
薄目で睨んで居て、殆ど口を利いたのを耳にしたも
のはありますまい。

餘程御機嫌のいゝ時でせう。何うかすると、頤を
引いて、しやくるやうにして、居合せた小兒を呼ぶ
と、可恐れけれど、通力で引寄せられるやうで、戦々
競々、傍へ近づかないわけには行きません。――
行くと、すき切れのしたお絹衣の、ハテナあれは
白い毛ぢやあないかと、思ふ綿のすく袂から、椎の
實を五つばかり、つらに爪の生えたやうな手で、だ
るさうに、恚うぱたりと指を開いて、小さな掌へ落
してくれます。

邸の背戸にある椎の大木で、あいつを揺つたらと、

小兒たちは富士の山ぼどに思ふ、其の實を拾つてく
れるでせうが、此ばかりは何となく薄氣味が悪くつ
て食べられなかつたものなんです。

・ ・ ・ ・ 時に、吃驚したやうに、其の百合の花を
見て立ちました。色が黒いから僕は蟋蟀、一所に居
るお邸の坊ちゃんは、づんぐりして居る處がお虻だ。
―― 建具屋の鐵公は、すばしつこい處が飛蝗だ
らう。次手に内の兄は、ひよろで生白いから露蟲か
などゝ思つて見て居ると、正面の其の階に、ふはり
と腰を掛けて、据ゑつけたやうな御隠居が、例の薄
目でじろりと視ると、鼠色の唇をぶる／＼と動かし
て頸窪で白髪を摺つて、顔を横に向けて頤でしゃく
つた。

「彼方へ行け．．．．」
と、言ふのです。

一所に立つたのが、孫の坊ちゃんだから氣が強い。
其の友だちが駈出さないから、僕も居ると、朱の撞
木杖で、とん／＼と、飛石を敲きました。

「はゝアー」
と友だちが突如蹲むと、妙な形に揉手をしながら、
「ねえ／＼、ねえー」
と後退りをして、其のまゝ連立つて背戸の方へ飛
出す拍子に坊ちゃんはぺろりと、舌を出して、
「鬼一法眼め、ちえツー」
と言つた。

咄嗟には、何の事だか分らなかつたのですが、其
の折から邸の背戸の大竹藪越に、ー遙に笛を
交ぜた囃子の音が聞えたので、あゝと合點が行つた
んです。

鳴り静めて、づゝと遠い處のやうですが、大藪の
うらが、すぐに樂屋に成つて居る、小芝居があつて、
當時、女俳優の一座が掛つて居たのです。

小遣ねだりの立見か何かで、僕も其の菊畑とか言
ふのから、續いて、忠信の狐、鼓を持った美しい静
の立姿などを見て知つて居ました。

以上が、いつも此の事について語る中尉の前置で

ある。

此^{これ}からが
お^{はなし}話。

—
—

却説、中尉乾三君の話は、順序として、何時も古ぼけた黒板塀の裏木戸に掛けた木札からはじまるのであるが、これを怪談だとすると、さしづめ幽霊の鬼火の形だと言つても可い、妙に捻つた、ぎざ／＼のあるくRuby古木をけづつた面へ、

(今日は此の家に居り侍り、御方様たち、おなぐさみ。)

と、變にべた／＼と太い線と、細い棒の字で認めたのを打釘に掛けてある。．．．場所は、神社の廣前を、廻廊について折曲ると、一方が少將本間家の垣で、突當りに宮の本殿と柵を隔てた山椿、銀杏の繁つた土塀の前に地主神の祠がある。其處から細く狭い．．．何處の國でもおなじやうな名をつけて呼ぶ．．．暗闇坂を下りると、汚い、暗い、人家の裏から、町中を貫流する大川へ出るのであるが、人通はめつたにない。．．．心得ないものが見れば、坂とは言はず穴のやうな岨である。

此の岨の一方が、おなじ少將家の矢張り外圍ひ
の生垣で、片側に其の書札の懸つて居るのは、前町
の中の、とある小路をぐるりと一廻りした處に入口
の門のある、荒れた大な古邸の庭から、こゝへ抜裏
の木戸であつた。

生垣には木槿が咲いて、此の花が秋晴の日中にも、
露に亂れて美しい。

地主神の祠と、木戸と三方向合つた本間家の垣の、
一蛭りして坂の曲らうとする角に、餘所では誰も見
掛けない、珍しい樹の大きなのが一株ある。楹
— で、此の根の張つたゝめに、垣も其處は膨
らんでちきれるばかり、土も根笹も薄暗い處にこ
んもりと茂つて、下から仰ぐ幹の半ばに、白、絞、
朱鷺色の其の木槿が盛な今頃は、林檎に似て、やゝ
楕圓形の、薄蒼い、小さな瓜ほどもある實が、枝に、
葉に連り實つて、此の陰氣なじと／＼としたあたり
は、近づくと最う澁甘く、そして酸味のある香が、
芬と滴るばかりである。

唯、其の樹の下に、蒼びかりのする、お絹衣で、
天狗の化身・・・否、本間の隠居が、白髪を白
く、赤い撞木杖に両手をのせて、腰を据ゑて、薄目
で撓めて、頤で覗くやうに、其の裏木戸の掛札を凝
と視て立つて居た。

「叱られやしないかなあ。」

「乾三が囁くと、」

「何ともねえよ。」

と鐵公が承合つた。

乾三は、いたづら夥間の建具屋の鐵公と二人で、
小兒には、年に一度の書入時の、榎の實を拾ひに
来て、すばやい鐵は、最上二顆。ぶらんと鍵裂のあ
る袂に一顆と手に一顆、疵のないのを拾つたが、乾
三は落ちて破れたり崩れたりした中をこつ／＼選む
うちに、隠居が朦朧として顯れたので、祠の方へ遠
慮して、其の白髪の何處へか見えなく成るのを待つ
たのであつた。

が、静と立つて動かない。

坂さかの下したから、ぼくぼく／＼・・・黒土くろつちの坂さかに、
はずまない靴音くつおとがすると、上のぼつて来たきのは巡查おまはりさん、
ー 式かたの如ごとく人通ひとほりが希まれで樹きの下したの薄暗うすくらさ、盗賊ぬすびと
が午睡ひるねでもしさうな場所ばしょゆゑ見廻みまはりに来たきのであら
う。

佩劍はいけんを遺放やりつばなしに、兩腕りやうでを拱こまねいて、薄眠うすねむさうに、ぼ
くりと上のぼつて来たき鼻はなの前さきへ、赤あかい撞木杖しゅもくづゑが道みちを切き
て、ぬいと出でたので、ぎよつとした體ていに仰向あをむいた。
鼻下びかに髭ひげのある顔かほに、海綿かいめんの皺しわも向むけないで、隱居いんきよ
の杖つゑは、件くだんの懸札かけふだを眞直まつすくに指さした、が、ぶる／＼と
動うごく。

「じゆんさ 巡查は立たちど停とどまつた。」

「せま 狭い坂さかの上うへを、ちよつかく 直角ちよつかくに切きつてぶる／＼して居ゐる杖つゑである。」

「かいぐん 搔かいぐん潜ひつばらるか、ひつばら 引拂ひつばらふかしなければ、たちま 忽たちまち髯ひげをゴツンで、とほ 通とほれはしないから。」

「なん 何なんで………あり ありますか。」

「じゆんさ 巡查じゆんさは一寸ちよつと擧きよしゆ手の禮れいを施ほどこした。かいわい 界限受持かいわいの警官けいくわんで、こども 小兒こどもたちも見知みしり越こしであるから、せうしやう 少將閣下せうしやうの父君ちぎみであるため、ちほう 地方ちほうの事ことで敬意けいいを表へうしたものであらう。」

「なん はあ、何なんでありますか、………はあ はあ、此このふだ 札ふだ。」

「けん と劍けんを垂直すめちよくに、かけふだ 懸札かけふだを見て立たつと、あんきよ 隱居あんきよの杖つゑも垂直すめちよくに下おりた。で、ぶる ぶる／＼と其その薄黒うすくろい唇くちびるを動うごかす。小兒こどもの目めにも、杖つゑで指さして、かけふだ 懸札かけふだの意い味みを隱居いんきよが詰なつたと見みて取とられる。」

「はあ はあ、はゝあ………こんにち 今日こんにち———けふ 今日けふはか、

今日は此の家に居り侍り……ふん。
携るやうに髯を捻つて。

「……御方様たちおなくさみ、と、
……ふん、はゝあ、はて、……いや、本職も
唯今はじめて氣付いたです。が、何なる廣告、何等
の意味でありますかな。――居り侍り――
な。むゝ、書は男子ですが、女子の言句のやうでも
あるです。變です、不可解ですわい、はあゝ・
……いや、御注意を謝します。」

と又一禮に及ぶ處を、杖が再びぶるりと指す。

「は、一應檢べるです。……直ちに取檢べ
んけりや成りません。――開きますかな、しか
し、此處は開くかな。」
と一步退つて、づいと板塀を見廻した、が、すで
に木戸に手を掛けると、ぎし／＼と軋んで開いた。

爾時の形が可笑かつた。半身を庭が呑んで、洋服
の腰と劍が靴を爪立つて外へ出て居た。巡査は、ぐ

つと入身いりみに中なかを窺うかがつたものであらう。やがて一跨またぎして入はつたのである。

隠居いんきよは心持こころもち 頷うなづいた。

乾三けんは、ちよろりと地主神ぢしゆじんの祠ほこらの裏うらから顔かほを出だして覗のぞいたが、もう一息奥いきおくに、銀杏いんげいの落葉おちばをがさこそと鐵公てつこうは潛ひそんで居ゐる。興行きやうぎやう 中の芝居しはかぶれに、いけずな面おもてを、辨慶べんけいだか、忠信たうのぶだか、色いろを塗なすつて隈取くまどつて居ゐたもの。

「それ、出でた。」

耳みみの疾はやい事こと。

「御大人ごたいじん、はゝ。」

と巡查じゆんさは、隠居いんきよに面めんして、淺あさく笑わらつて、

「速すみやかに相分あひわかりました。仔細しさいありません。此これは――

御承知ごしょうちでもありませんが、前町まへまちの角かどに旅店りよてんを營いとなみ居をります、彼の宮本みやもとですな、宮本みやもとの主人しゆじんがですな。

豫々活花かねゝいけばな、茶ちやの湯等ゆなどをたしなみますが、自宅じたくは手狭てせま

でありますので、當家たうけに於おいて、此この庭にはに面めんしました一室しつを借受かりうけて、時々じゝ其その出張しゆちやうをするのださうであ

隠居が又しても唐突に杖を突出したのである。

「はゝあ、――居り侍り、――いや、女子の言句らしい點に就いては、ですな……別に立入つて訊正もしなかつたですが――娘が来て居りますわい、宮本の、はあ。娘と一所にと主人が言うて居つたですからして、矢張り茶の湯をやるのでせうな。ために、口上のうちに女性を含んで居るかにも考へられます。はあ、で、御大人には、何等を御不審の點――はゝあ、御了解に相成りましたか。……御大人も、如何です、御徒然の折から些とお慰み。」

と木戸をしめ状に言ひかけて、

「しかし奇抜ですな、誰も一寸これは氣が付きますまい、御方様たち、おなぐさみ、――」

と札と隠居を等分に視ながら、

「御免。」と會釋で、前を抜けて、反身の境内へ、劍の鞘が光つて行く。

・ ・ ・ ・ ・ 鐵公と二人は、言合せたやうに、祠の陰からひよいと出た。

事ありさうに、物議を起して、巡查が故々庭へ入つて調べたほどの懸札である。小兒に取つては降つて湧いたもの珍しさの好奇心、口では言はぬが同じ思ひで、待しばしも何もない。

「や、此だい此だい。」

と鐵公は札の前で、二度ばかり躍上つた。攀上りさうな勢で、

「乾ちゃん、讀めるかい。」

「讀めらい。」

今日は此の家と讀んだ時、ふと氣に成つたは、札の横のふし穴で、縦裂も横破れも透間は塀に矢鱈にあるが、其の一番小さいのに、水晶のやうな目が一つ。

「あゝ、音羽ちゃんだ。」

と即座に思つた。いま風説の宮本の娘であ

る。

「今日は――この家――に居り居りだ

い。……其の次は變な字だぜ。」

と鐵公は跳ねながら、背後に天狗の居るのも忘れ

た。……縦嚙り楯に、みしと齒を立て、

下齒で引掻いて、ふツと青い皮を噴散らしたと思ふ

と、

「わツ。」と言つて、怪飛んだ。

御隠居の杖が、其の出尻をぴしりと一つ見舞つた

のである。

「痛い！　痛いや。」

きかない氣の鐵公は遁足を捻り状に隠居に齒向い

た。隈取つた異様な獅嚙面を硝子覗機關の崩れたや

うに、くしや／＼揉んで、

「へツ、樹から奪つたんぢやあござんせんや、拾

つたんで、へツ、拾つたんでございますよ、痛えな

あ。」

又またゴツン。

「痛いたえツ！ 酷ひどいや、酷ひどいなあ。」

強情がうじやうな奴やつで、なか／＼遁にげぬ。泣なきながら地ぢだんだを踏ふむのを視みて、隱居いんきよの唇くちびるは一際きはくち暗くらく成なつて、撞しゆ木杖もくづゑを振被ふりかぶつた。

振ふり上げながら、且かつ振向ふりむいて乾三けんの方ほうをじろりと視みた。

と遁にげるにも、杖づゑの下したを潜くゞらなければ成ならない。

—— 乾三けんは泣出なきたした。

ぎきいと木戸きどが開あくと、紅あかい蹴出けだしがちよこりと出でた。

「御免ごめんなさいませよ。」
と優やさしい聲こゑ。

結綿島田ゆひわたしまだの大きおほなのをゆら／＼と、白しろい片手かたてで翳かざすやうに杖づゑを止とめた。が、片袖かたそでで包つゝむばかり庇かばつたのは乾三けんの方ほうであるから、隱居いんきよの杖づゑは下さがりしなに、

鐵公の頭を掠つた。

「きやツ。」と叫ぶと、くる／＼と舞つて遁げた。

踵を打つて裙長く、素足に庭下駄を穿いた、音羽ちやんの妙に艶いた風俗を下目で見ながら震へて居た乾三が、袖の中から密と顔と島田を視た。

此の時である。四邊は森然と楹ニの香に満ちつゝ、赤い帯した姿を、百合の花其のまゝと思つたのは。

「さ、行らつしやい。」

背中を撫でゝ、押すやうに出してくれた。

駈出す處を、背後から、

「お兄様に、よろしく……ね。」

唯、楹ニの下を垣根について、一方に奥殿の玉垣を見る時、――お宮の神主が高い廻廊の北の端の處に、欄干づれに伸上つて、暗がり坂を差覗いて居るのに氣がついた。

嬉しや……氏神のおもり役は、小兒の泣聲

を憂慮つて、

――

四

「お兄様によろしく・・・ねー」

「乾吉と言ふんです。」

と中尉は、いつも此處で一寸更めて言ふのであるが。ー

其の兄に、ことづけを聞いたのもはじめてであるし、又どれほどな知己だか分らなかつた。唯、兄と音羽ちゃんについて乾三の知つて居るのは、ー
同じ年の梅雨時分であつた。陰鬱な、しかし雨の晴間を、黄昏に、夫婦づれらしい糞れた旅のものがふたりたどつて來たのが、乾三の家の、仕事場の格子に立つて、宮本、と申す旅店は、と言つて、揃つて菅笠の手を下げた事がある。

職人たちは、最上仕事を済まして歸つたあとで、折から居合せた兄が丁寧に教へた事は言ふまでもない。

其の晩、燈の下で、晩食のあとを、孔明が何うの

關羽が何うのと、父と三國誌が何か話をして居ると、
雨つゞきのあとの薄寒い夜で、最う蔀を下した、戸
の外へ、此の横町の山寄り辻の方から、コトノと、
低い聲音が軒つたひに近づいて、乾三の店の前へ來
たと思ふと、はたと止んでそれなり消えたやうに寂
寞する。

唯、顔を上げた兄が、何と思つたかファイと諸脛で
立つて、トンノと二階へ上つた。

妙に薄さみしい氣がして、間の隅が見廻されたく
らみである。

「――あとで、乾三が二階へ上ると、兄は机に頬
杖をついて居たが、

「乾三、今來て戸外へ立つたのを當てゝ見せよう
か。」

「うむ。」
「宮本の音羽さんだよ。――用事は、祖母さ
んに、お米を借りに來たんだ、屹とだぜ……。・
若い男が居ちやあ極が悪くつて入れないんだ、可哀

相あひまにな。」

と云いつてほろりとした。

其その通とほりであつた。

最もう一つは、つい近ちかい頃ころ、お互たがひに貧乏びんぱふぐらしでも、
宮本みやもとは風流人ふうりゅうじんだから、二十六夜やの月待つきまちをする。

「まだ些ちと陽氣やうきが早はやいんでございますが、薄すすのあ
ります處ところを、御存ごぞんじではないでせうか、一寸御伺ちよつとおうかひ
に。」

と店みせへ音羽おとほちゃんが使つかに來きた。

美ひつしいので、職人しやくにんたちは、

「よう。」

反そる。．．．．

「立野たてのの原はらだとあります。．．．．些さと遠とほいか
ら、僕ぼくが取とつて來きて上あげませう。」

と兄あにが言いつた。

「いゝえ、それは、あの、私わたくしがまゐりますけれど、

父ちちから申まをしました通りとほ、おいでをお待まち申まをしますわ。
「

「よう。」
と又また職しよく人にんが揃そろつて反そる。

音おと羽はは火ひのやうに顔かほを染そめて、カタノと駈かけ出し
たが、其その晩ばん、兄あには其その月つき待まちに招まねかれて行いつて、乾けん
三さんの寝ねる時じ分ぶん、まだ歸かへらなかつた。

明あけ方がた、勢いきほひよく、乾けん三さんを揺ゆり起おこして、

「おい、月つきの出での話はなしをして遣やるよ。起おきるよ、起お
きるよ。」
と揺ゆすつて、抱だいたり、小こ突ついたり、耳みみを撮つまんだり。

「寝ね坊ぼうめ。」とあはノ、笑わらつた。

起おきるもんか、そんな時じ分ぶん。

あくる日ひ――宮みや本もとの表あせて二おそ階かいから眞ま正しやう面めんだと言い
ふ、春かすが日がやま山と臥くわり龍りう山ざんの峰みねの分わかるゝ處ところへ、きらりと鍬くは
形がたの如ごとく輝かざいてのぼると傳つたふる。――其その二十
六む夜やの月つき待まちの景けし色きを聞きかうとすると、忘わすれたやうに、

ぼんやりして居た。

―― 其^{それ}だけであつた。

「乾ちゃん。」

此處は榎^ニの樹のある處とは反對の側の、すぐに
前町の片側の、續いた軒の背戸々々が見える。氏神
の宮の縁の片隅に、小さな胡坐かいた鐵公が、聲を
密めて、ものありげに。

「乾ちゃん、お前、何だなあ、此間あれだなあ、
本間さんの坊ちゃん庭へ遊びに行つて、大藪の中
で何だか見たつて言つて居たぜ。——眞個か。」

「藪玉よ……大なる蜘蛛の巣か。」
とうつかりして、氣もなく言つた。

「馬鹿言つてら。」
と鐵公は低い鼻を仰向けて、日向を吸つて嘯いて、
「藪玉や蜘蛛の巣が何に成ります。そんなものを
聞きますか。へッ、そら、眞紅に何だか綺麗なもの
があつたとか、居たとかツて言つたぢやあねえか
よ。」

「あゝ、それはね、藪の中ぢやあないよ。」
「では何處だい。」

「うむ、藪の中は藪の中だけれども、づゝと奥へ入った岨のね、深い溝のちよろ／＼水が流れてる處に居たんだ。――綺麗なものだつた。眞紅でね、上にきら／＼と金色が懸つて光つて居るんだ。一寸見たゞけだよ。僕たちはね、妖怪退治の眞似をしに入つたんだから、やあ、ござんなれツて、然う言つて、坊ちゃんが假聲を使つて、持つてた半弓の矢をはなした。當つてね、すぐに隠れたけれど、追掛けて來ると恐怖いからつて遁出したんだよ。あゝ。」

「君！・・・」

と鐵公は猪首をすくめて、一層低聲で、

「何だと思ふ。」

「なにを。」

「その、紅い煌々して綺麗なものをよ。」

「本間さんの家の、ぬしですよ。」

今は散つたが、蜻蛉つりにも面影立つ、境内の百

日紅の色より、生垣を隔てた傍の背戸に咲残る。夾竹桃の花にして尚濃かつたのを思ひながら乾三に然う言つた。

「五百年経つた赤蛙だつて言ふけれど、違ふ・・・僕内のは化緋鯉だつて坊ちゃんが言つて居た。」

「へ、嘘だい。」

「ぢやあ、坊ちゃんにでも誰にでも聞いて見ろ。・・・ぬしは居るんだよ。何處の内にも、蟹だの、龜だの、鼠だの、蜘蛛だの。」

「そりや、そりや居るさ、ぬしは居ますさ。僕内のなんざ蛇だけでもよ。・・・お前の見たのは然うぢやあねえや。」

「だつて、坊ちゃん。・・・」

「そのな。・・・坊ちゃんだつて知らねえんだ、知らねえで、ぬしだと思つてるんだけれど、違ふ。・・・おい、言つて聞かせようか、誰にも

言ふなよ。」

と鳶肩をして、又低聲で、

「それはな。帯か、袖か、腰巻か、何でも女の着ものなんだ。」

と横撫のある袖を引張り、膝小僧を小刻に敲いて饒舌る。

乾三は目の前に、ニと虹が掛つたやうに目をニつた。

「ー 思へば、大藪をもらて、其の一幅が草がくれに水に映つて、虹の彩にも似たのであつた。」

「へつ、其處で、其の女を誰だと思ひます。」
鐵公は、掌で抱へた頤を突出して言つた。

「俳優ですぜ、若い女 俳優ですぜ、——お
前、あの、水溜の小屋の義經の芝居で、美しい靜
御前を見たらう、見たかい。」

それは視た。

「あの女が殺されたんです。」
何を言ふやら、餘の事に乾三は唯黙つて聞くと、

「芝居の方ぢやあ、何處かへな、遁げ出して行方
が知れないつて事に成つてるんです。そら、入が餘
りなかつたらう。そんな時はよく遁げるのがあるつ
てよ。——最う一人、何とかつて俳優と二人遁
げたんだつて、其の方は何うでも構はないけれど、
あの靜 御前をしたのが居なくつちやあ、お前、尚
の事入がないぜ。だから病氣で休んでるつて誤魔化
して居たけれど、それでも、たうとう休んで了つた。

だもんだから一座はな、とやつてものに成つて何う
することも出来ないで居るんだとよ。それでもあれ
だ、静御前は遁げたんだと思つてるんだ。――
僕ン許は芝居のすぐ前だらう、樂屋にも知つたもの
があつて、よく知つてるんだ。それが、お前、眞個
は、處で、お前殺されたんです。誰が殺したと思ひ
ます。へつ、分りますまい。」

嘘だとは思つても、小耳を立てずには居られなかつた。

「本間の隠居よ。」

とスカリと言つて、きよろ／＼と四邊を見廻す。
立派な門が向うに見える。

「天狗だつて言ふが然うぢやあねえ、天狗はお前、
人を攫んで去つたつて、股から引裂いて樹の上になら
下げたつて、悪いことをしたものに罰を當てるん
だけれど、爺いのは然うぢやあねえ。綺麗な娘ばかり
狙つてな、人身御供に取るんだい、彼奴あ、狒々
だぜ。」

と額ひたいに皺しわを刻きざみながら、

「それで以もつて、お前まへ、あの、美うつくい伴やくしや優やをよ、裸はだか體かにして食くつたんだ。其その衣きものを大おほ藪やぶの溝みぞへ突つ込こんで隠かくしたんだぜ、さうら、何どうだ。――それか
らな、食く餘ひあました死し體たいをよ、其そ奴やつをさうら、

と顔かほを見みる。饒しやべ舌へるのを聞きく發はず機みに、楯まゐ二ろ、と思おもつた通とほり、

「楯まゐ二ろの樹きの根ね方かたを掘ほつて、突つ込こんで埋うめたんで
す。……だから。一ひとり人りでも、誰たれか、人ひとが、あ
そこの傍そばへ行ゆくのを可い厭やがつてそれでもつてからに、
廣くわ告わくの札ふだを心しん配ぱいしたり、杖つゑで打ぶつたり酷ひどい事ことをしや
がるんだ。……畜ちく生しやう、痛いたいぜ、狒ひ々々め。」
と獅しか嚙み面めんをベソにして、

「僕ぼくあ泣ないた事ことなんかねえんだけれども、痛いたかつ
たぜ、畜ちく生しやう！ 矢や張っぱり、食くやがる前まへに、靜しづか 御ご前ぜんの
姉ねえさんを、あねえの杖つゑで打うつて半はん殺ころしにしやがつたに違ちが
えねえんだ。」

馬鹿な事をと、思ひながら乾三は身震した。

「それで、なくつてよ、……誰が黙つて食はれるものか。屹と打つたぜ、裸にして其の何だい、白壁にちよろ／＼火つて女 俳優をよ。」

「一も二も何もない。撞木杖で撲はされた遺恨に、不斷から亂暴ものゝ癖に、――蛇が家のぬしだと公言するほど執念の深い對手であるから、事もあらうに御隠居を殺人犯にして出放題に相違ないとは、小兒心にも合點がいつた。」

「が待てよ、――嘘を言ふにも程がある、と餘りに其のあくどいのに悚毛を立てたが、いまの（白壁にちよろ／＼火）でよく分つた。――鐵公ばかりの作意ではない。豫て聞囁つたいろ／＼の談話を緇交ぜにしたのである。」

「――此の社務所に、見習の神官で、渾名を

（女郎）と言つた、しよな／＼した若い男が居た。面と向つては、まさか女郎とも言へないから、上臆

さんと言ふと、はいいと嬌態をする。．．．此の社務所に、見習の神官で、渾名を（女郎）と言つた、しよな／＼した若い男が居た。面と向つては、まさか女郎とも言へないから、上臈さんと言ふと、はいいと嬌態をする。．．．此の頃は最う京阪地で、新派の俳優に成つた、と聞く。

其の神官女郎が、實際話ずきで、よく此の廊下へ前町の小兒たちを集めては身振假聲まじりでさま／＼のものを語をしたものである。題は、俊徳丸、三莊大夫。そんなものより武しや修行の武勇談が大得意で、一條の中には大抵美しい娘が山賊にとられるか、人身御供に上る場面がある。――其の娘が、或は迫害、或は、凌辱を被らうとして、あはやと言ふのが白壁にちよろ／＼火。で、火が燃えると言ふ意味ではない、衣が解けて、手足亂點、肌に緋縮緬が亂れて搦む形容である。トタンに會心の英雄が顯れる。――

鐵公のは、其の横脚へとは言はずとも知れよう。

「ぢやあ、それぢやあ、其處で誰か強い人が行つて助けるんぢやあないか。」

鐵公はまくり手に、威す眞似して、

「馬鹿、そりや昔の話だい、眞個の事が然う巧くゆくものか、馬鹿言つてら。」

「では、何故、警察で黙つて居ますか。」

「あれ！ 分つてらい、知らねえからさ。でも、こんな事はうっかり饒舌ねえよ。少將 閣下の御

隠居の事だからな。」

「然うすりや、殺された人は可哀相だなあ。」

「だからよ、それだから、内證でお前に聞かして遣るんだ。―― お前ん許でも然うだし、お前だ

つて、あの、宮本の小父さんを知つてるぢやあないか、あの、小父さんは、お前何だと思ふ。・・・

え、警察へ勤めてるんぢやあないけれど、探偵だぜ、探偵の下働きだぜ。―― だから、密と然

う言つてよ、何うにかしてよ、静 御前の敵討をして遣らうぢやあねえか。」

「可厭だ。」「と乾三は立處に頭を掉つた。

「いつつけぐちをする奴は、殺したものよりは尚ほ悪いや。そ、それだし、そんな事を言つたつて證據も何も無いぢやあないか。」

「證據呼ばはり、へん、よしてくれ。」
と喙然として、鐵公は怪しい假聲で、打棄るやうに言つた。

「あの、爺が二度も三度も芝居に入つて居た事は僕だつて知つてるぜ。――袂の椎を噛つてな、……樂屋の裏は、風呂場も一所に、お前、峩一つで、すぐに本間の大藪ぢやあねえか、寂い日暮方よ。……故郷でも戀しかつたらう、長旅の女、俳優だから、鼓を持つたまゝで、ふらりと出る處を、向うの藪に、あの爺があの形で、薄ぼんやりと、神様だか、魔だか知らねえ立つて居て、ぬうと撞木杖を出して招いたとよ。……爾時な、爺がな、片方の手に、同じ鼓だとか、袱紗に包んだものとか持つて居たつて、見たものがあるんだ、僕内の職人の中によ。」

見たものがあつて、然う言ふけれど、あの、椎の
實爺め、僕は楹の實だらうと思ふぜ。其奴が狒々
の通力で、静御前の目に、玉子ほどの寶珠の珠、
眞珠かなんかに見えたかも知れねえ。二と成つて誘
はれて行つた處を、それ、大竹藪へ引込んでな、白
壁のちよろ／＼火だぜ。」

秋の暮だの、故郷だの、長旅の女だの、鼓を持つ
たの、鶏卵ほどの寶珠だの、眞珠だの、ぶら／＼と
誘はれたのと、いづれもお女郎神官の話の中に織交
ぜてあつたのを、絲口もつけずに引出したものらし
い。建具屋の職人の中に見たものがあると言ふ。そ
れにしても、中僧小僧ぐらゐな處は、いづれも町内
の若いなかまで、お女郎の話のきゝ手の中に交つて
居たから。

しかし、何にしても慘たらしくて聞いて居られぬ。
よけて遁げるやうに階へ出て立つと、秋空を颯と一
陣の雁が渡つた。――あゝ、あの中に、行方の知
れない静が交つて飛びはしないか。

砧打つと響いたのは、楹の實の音かも知れない。

日はわすれたが、裏木戸には例の懸札が出て居たから、世間並に然うした催を、月六齋　　此は後に心着いた事ではあるが　　それだと次の週の中頃であらう。　　日の暮方、その時は、乾三唯一人であつた。

如何に寂い場所でも、穴に似た暗がり坂の、底は知らず、降口の處までは行馴れた境内の地續きだし、土地の守護の神はおはす。家を出る時、ちやんと帯の結目を敲いて貰つてある。　　鐵公の言つた、此の榎の根に、亡骸を埋めたなどは、何處で聞いても不氣味な事は同じだけれども、頂から嘘だと思ふから可恐しくはない。

いまが熟れ頃の食べ頃の　　あゝ、唾が走る　　榎の實を取らないで我慢が出来るか。　　書からも二三度窺つたが蝸牛だつて最う些つと早く歩行く　　何時も同じやうな垣根に、白髪が杖に縋つて這つて居た。　　過般にこ

りて傍へも寄り着かれないので、廻廊から覗いては引込み、引込み、恚うして時間を移したのである。

恰も居ない。生垣の霧も爽に霽れて、木槿の花さへ、吻としたやうに露を吸ひ、露を散らす、露は散りつゝ風もなかつた。

楹の樹は、いま其の幹までも芬と薫る。強い薫に包まれたやうに、葉の下に立つと、さながら乾三は、木精が與ふるものゝ如く、梢からトーンと手鞠のやうな實が一顆。落ちかゝるはずみに空に弧を描いてトーンと響いて、其が地主神の祠の屋根へ落ちた。が、ころん／＼と二つばかり棟を、這つて、ぼたりと其處へ、最う一息で地へ轉がりさうな、瓦の出端で一度留まつた。

銀杏の落葉の散敷いた上に、黄なる盆に乗つて、水々とした色を浮上らせた形は、地に落碎けたものゝ類でない。

其處は小兒で、眞下へ行つて、手を擴げて仰向い

て待つた。

又、不思議に、ことんと動いて、スツと落ちたが、
受ける手が小さくて、取外すと、這つて外れて地へ
落ちた。

熟した大な果實は、此の時に一處、小指で壓した
やうな疵がついた。……其を嬉しさに、兩
手で拾つて持つたが、莞爾しながら板塀の節穴に目
を遣つて、又莞爾した。

音羽の目が一つ、其處を覗いて居た處である。唯、
楹のいまの小さな窪が、目を刻んだやうである。

が、何も思はず、齒を當てると、同じ形に、其處
が又目に見えて、行儀よく二つ並んだ。

あんぐりと又遣つた。が、今度は、我が舌を噛む
まで吃驚した……。其處が口と同じに見えたの
である。

地主神の銀杏のはづれを、古土塀の大椿の上から、
葉越に半輪の薄月が、スツと映すと、蒼白い中高な
顔が一面、乾三の掌へ乗った。

あの時、神主の姿が見えぬと、きやつと叫んだ
まゝ、投飛ばして遁げたであらう。

廻廊の端へ、玉垣の上へ乗出すばかり、烏帽子を
高く立てゝ此方を差覗いて居たのが、此の時笏を伸
ばして、恚う、その乾三をさし招く。・・・過
般と同じ神官で、此は當社の宮司である、が、夕拜
のまゝの服装だと見えて、紋紗の装束をつけたのに、
月が染みて、木槿垣の花の影が、淡紅も、白も、と
もに絞に成つてほんのりと映る。

頬は瘦せて、澁色した、面に痘痕はあるが、其の
打上つた姿なのが、靜に笏を以つて、装束の袖とと
もに卷込むが如くちつと招く。乾三は引寄せらるゝ
如くちよろ／＼と寄つて行く。

行く・・・其のうちに、雲を踏んで沈む體に、

廊下のはづれに、向うむきの宮司の手なる櫛は、
尚ほ面影立つて、黒髪も長く、影のやうな白い胸も、
腹も、柔軟りと膝の上に、女を抱いたやうに見えた。
あゝ、乾三の齒のあとの、其の口を、眞うつむけ
に成つて、宮司は、ぴた／＼ぴた／＼と吸つた。

氏神の宮の神官、――分けて、冠、束帯した姿は、不斷から普通の人間ではない。緋の法衣、紫の袈裟の坊さんより、もつと尊いものゝやうに小兒には思はれる。其の神主が、

「御褒美を取らせます。――」

第一それ、口のきゝ方からして凡でない。

時間に約束はなかつたけれど、何となく、自然の規則があるやうで、昨日と略同じ時分に社へ行くと、祭日、三日と言ふのではないから、石の御手洗の噴上の水の音も絶えて、境内は寂寞として、時々木の葉が散るばかり、拜殿には人の影もない。

こゝで、聊か覺束なかつたが、何うかと思ひながら、横へ折れると、繪で見る山の端に鹿が一頭イんだ形に、廊下の端に神主が立つて居た。

待兼ねたやうに、又笏で招いて、近々と寄せて、幾干か知らん、金をくれたが、乾三は断じて取らな

かつた。

強ひても横に掉る頭を撫で、

「よい兒ぞ。……別の御褒美を取らせま

す。……また、楹をな。」

乾三は合點々々しながら、

「落こちて居るのも可いの？」

「苦しくない、苦しくない。ぢやが、泥土に汚れ居らばな、御手洗で洗うてくれませい。」

うまい事を聞いた。此からは此方も然うせう。

が、また折よく、五ツ六ツ落重なつて居たので、其の中から清潔らしいのを拾つて、矢張り、節穴に音羽の目がありさうな気がして、莞爾笑ひながら、女の子のする鞆を抱くやうにして衝と急いで欄干へ持つて行くと、捧げる楹を、凭う、袖ぐるみ笏をあげて翳すやうにして撓めて視たが、

「昨日のやうに、童子、目と口をつけてよこしま

せ。」

と、のり調子で言った。

三處、齒のあとをつけたのを、見ると我ながら顔に似て居る。

例の如く搔込んで、抱取つて、

「去ねや、童子、明日も來ませ、よい兒ぢや。」
と、とんと斜に歌膝に成つた。

ちよろりと隠れて、竊と視ると、いや、又びた／＼と舐める、吸ふ

今度は不氣味なより、可笑いのであつた。

「兄さん　ー　」

おなじ事が四五度あつてから、楯を一顆持つて歸つて、兄に見せて、其の話をした。・・・同斷に齒形をつけたのを、袂からゴツンと落とすと、疊の上へ、一つはずんで、仰向けに丁度顔が出た。が、齒でつけたあとが錆びて、一雙の目は黒く、唇は澁色して、燈火に赤らんで見えたのである。

兄は机に凭れて、傾いて、黙つて凝と視て居た。

「乾三、串戯に、此奴を持つて行つて、榎の法印に聞いて見ないか。」
と言つて、見料を渡した。

おもしろい！

榎の法印は、年はまだノ、三十には成るまい。横ぶとりのづんぐりしたのが、髪を長く、元結で結んで切下げにした男で、秋も半ばを過ぎたと言ふのに、まだ浴衣を着て居る。薄汚い襟のかゝつた襦袢を襲ねて、此の町の表通りを、下町へ出る處に榎坂と言ふのがあつて坂の上は大榎が一株ある。其の樹の下に、根に縋つて、四本柱に板屋根を葺いた、蟲籠の如く切子燈籠に似た小屋に居る。手品師で、卜者で、でろれんを語る旅藝人である。

田舎まはりの寄席の落こぼれだとも言ふし、もとは俳優だとも言ふ。嘗て劇場で興行して、一時人氣のあつた全世界周遊の奇術師、放流齋テレメンの弟子で一座を脱走して残つたのだとも言ふ。夏場の露

店に出で居たのが、とやに就いて巢立ちも成らず、
塀に居るが、夜番の名儀で町内でも大目に見て置く。

竹の欄干に、蜜柑箱の臺を飾り、古新聞を敷いた
上へ、一、紙裂よりにて火を釣る法、一、茶碗を倒
にして水のこぼれぬ法、一、鼻息にて蠟燭を消した
り點したりする傳など、繪入で畫いた比羅紙を展げ
た上へ、井に水を湛へて、一枚浮かした竹の葉の上
へ、まつすぐ花を活けたのを看板の眞中、總のつい
た法螺の貝の傍に据ゑて、一方に筮竹と算木がある。

一 一 榎の法印。

それに占はせうと言ふのである。

……おもしろい……

乾三が榎ニを持つて、一走りに行つた時は、角店
の燈をたよりに榎の月影かんでらの、火も點さず、
身體一つ漸と入る蜜柑箱の背後に、汚れた後幕を張
つた處へ、仰向けに成つて、徒らに長くした髪をひ
ら手で扱きながら、ふかし芋を嚙つて居た。

「うらなひを占て下さい。」

「おいでやす。」

と軽い返事も、誰も怪まない馴染の法印。

「ひや。」

と滑稽けた顔をして、

「何を見まんね。」

「此の……身の上だつて。」

と、ふくりと置く。

「ほう。櫛に目やな。」

と等分に乾三の顔を見た。

「こりや、これ、金時と女郎を一所に口よせに寄せる傳や。誰のてんがうや知らんが、天眼通をもつて占てこまそか。占よりは人相やて。」

と太棹の蟲目金を取ると、片手で忙がしくお芋の食ひさしを袂に入れて、――櫛の上へ鹿爪らしく月あかりで照した。

あゝ朦朧として、目も顔も蒼白い。

法印は二三度、頭を傾げて撓めて見たが、蜜柑箱に乗掛つて顔を寄せて、ふん／＼ふん／＼と香をかぎつゝ、其處に人も居らぬ状に、蟲目金をバタリと落すと、ひたと凭れて、片膝をぐいと立て、膝頭へ肩を落して、ぐたりと成つて、前のめりにのめり状に、其の楹をペろ／＼と舐めたのである。

「何をしてるの。」
呆氣に取られた乾三の背を、軽く敲いたのを、振向くと音羽ちゃん。

坂は辻に成つて居るから、宮本の角家は透かすと、見えるくらゐな處に近い。

買ものにも出たらしい、襟のかゝつた衣ものに、色模様のある前垂がけで、姿は此の方が嬉しかった。

と、言ひすてに坂を降りて行かうとすると、法印がべとりした顔を上げて、
「あゝ、うまい、音羽はん。」

「
」

「あんたを食^たべて居^あまんね。」
と言^いつた。

「可^い厭^や！」

とたゞきつけるやうに云^いつて、肩^{かた}までくねらし、カタノ、坂^{さか}を駈^かけ出す。駒^{こま}下^げ駄^たの音^{おと}の冴^さえに、颯^{さつ}と落^おつる霧^{きり}のやうに薄^{うす}赤^{あか}い榎^{えのき}の實^みを浴^あびながら、噓^{くさめ}も出^でないで、乾^{けん}三^{さん}は、とぼんとしたが。

――して見^みると、神^{かみ}官^{くわん}も音^{おと}羽^はさん^{さん}を食^{たべ}るのかも知^しれない　――

「乾^{けん}ちゃん。」

と些^ちと鋭^{すざん}いばかり、透^{とほ}つた聲^{こゑ}の音^{おと}羽^はさん^{さん}が呼^よぶから、坂^{さか}の中^{ちゆう}途^とへ飛^とんで行^ゆくと、下^{した}を小^こ流^{ながれ}が抜^ぬける、石^{いしがき}垣^{きは}の際^{きは}に、水^{みづ}の音^{おと}が誘^{さそ}ふかして、袖^{そで}を震^{ふる}はして待^まちつけて、ソと手^てを取^とつて、

「お兄^{あにさん}様に、何^{なん}にも言^いはないで頂^{ちやうだい}戴^{たい}よ。」

榎^{えのき}の根^ねの法^{ほふいん}印^{いん}が、あはれとも、寂^{さび}しいとも、嫌^{いや}味^みとも、譬^{たと}へやうのないふしで、

「
―― 今日けふは此この家やに居をり侍はべり、
御方様おんかたさまたち、おなぐさみ ー ー」

「くやしい。」
音を殺ころして、沁入しみいるばかり、袖そでの涙なみだの、手ての甲かぶに
はら／＼とかゝるのを、引入ひきいれられて泣出なきたしさうに、
涙なみだに濡ぬれた指ゆびを噛かむと、何故なぜか楯まるめろの匂におひがした。

が、言いふなと言いふなら、兄あにには何なにも言いふまい。し
かしながら、唄うたは聞きこえる、しやくひ上げ、そゝるや
うに、

「
―― 今日けふは此この家やに居をり侍はべり、
御方様おんかたさまたち、おなぐさみ ー ー」

「乾ちゃん、私に其の楹ニを見せておくんなさいましな。」

後の日の夕　　ー　　暮れた時、乾三は音羽に手を曳かれて、不思議な處を歩行いた。

夢路を辿るのでもなければ、雲を踏むのでもない。が、町内の深い路地の突當りの、まだ入った事のない邸の中を、廣庭を抜けて通るのである。

ー　　茶の湯の出張りに借りたと言ふ、黒堀の木戸の家である事はすでに知れよう。　　ー

音羽の言ふには、幾度も楹ニの下へ行つて見たが、顔のある實としては自分では一顆も見當らない。で、乾三の手から見せて欲しいのだと言ふ。　　・　　・　　・　　其は可いが、乾三を呼出して、此の要求をするのに不思議なことを訊いた。

「乾ちゃん、もしか、そんな楹ニを神官さんに見せやしないの?　　・　　・　　・　　」

乾三はピクリとした。仔細は知らぬが、右にかく、
檀の法印の前にころがした時は、丁度音羽が其處を
とほりかゝ通掛つたのであるから、何か、氣に懸る事があらう
も計り知られぬ。けれども、神官の、あの様子を、
知つて居よう道理がない。何うして、と訊くと、

「否ね、何でもないんですが、あれから此方、毎
晩のやうに、私、法印の夢を見るのよ。同じやうに
お宮の神ぬしさんも、――そして私をね、酷い
めに逢はせるの。」

乾三は、知らない、と言つたが、泣きたく成つた。
毛ほども音羽の身にかゝつた事とは思はない。・
・・御褒美だつて、色鉛筆とノオトが一冊。

でも、しを／＼として、袖について従つて、荒れ
た庭を通抜けた。

ト音羽が塀の内へひたとついて、密と節穴から外
を覗いた。

「あの、目だ。」
と思ふうち、靜にギーツと木戸を開けた。

町も坂も、裏返しに轉覆して見るやうな氣がして、
もの珍しさの小兒心に、しよげた中から、坂の上へ
飛び出づる。

「密とよう。」

と音羽が低聲で制したので、悪く靜つた、が扨て、
おなじならば、鼻屑分に、此の娘さんには、落ちて
居る實でなしに、いつかのやうに地主神の屋根に一
顆、と熟と視た。・・・が、月が其の時より大
きく圓いばかりで、落葉のほかには樹の影ばかり、
何もない。

振り返ると、音羽が引添つて居るから、ふし穴の目
のかはりにうら透いて薄が覗いた。

「見つかれよ、いゝ楹。」

蹲んで探すと、乾三の手より前に、熊笹が、ざわ
／＼と動く。・・・其の動くのが、がさ／＼と
激しく響いた。

垣の内に人の氣勢。

眞先に思ふのは、白髪しらがの總髪そうはつ。ヒヤリと退ると、

音羽も浮腰にひつたりと木戸についた。

「音羽。」

「」

「音羽。」

「あれ、父上。」

「俺だ。――静にしねえよ。」

と含まつたさび聲して、木槿垣の根を、低く、暗く搔分けながら、這ふやうにぬつと出たのは、驚いた！……宮本の小父さんである。

蜘蛛の巣か、土か、汗か、抜上つた角額を、平手ですつと横に撫でると、感慨の籠つた深い息を吻と吐いて、

「あゝ……ひびき……久しぶりで、音羽、腕を見せたぞ、……女俳優を殺した奴あ、分つたよ。」

「まあ。」

「然も死骸は此の樹の根にある。」

「あゝ、父上。」

「俺の娘が、こんな事に怯えて何うする。いや、
惨らしく遣りやがつてな、此の内側のな。土手下の
穴に埋めたぜ。――何に、探索も苦心もな
い。……榎の法印め、此の榎を拾つて、目
鼻がある。……氣にするなよ、音羽。……
・お前の味がすると吐すさうで、不埒な奴だ。ど
んな榎だか見た上で、ひつ懲らしてくれようと、
珍しくもねえ樹の下で、ふと風の吹くやうに考へた。

榎に顔がある。唯それだけの事なんだが、ひよ
つと浮んだ一氣にまかせて、無駄だと知りつゝ、一
寸潜つて、よく探すと、直ぐに知れたぜ。此奴は、
手柄より因縁事だよ。……輪廻と言ふのだ。」

「そして、父上、殺したのは。」

「勿論、隠居だ。」

「え。」

「白髪の狒々よ。」

「あの、そして何うするお心なんです。……」

「

「知れた事よ！ 引締る。」

と胸を反した。腰にひたりと、昔の十手をそばめて居た。

「しかし、俺は職分でねえ。．．．あゝ其の職であつたらな、少將の親だらうが、大將の子だらうが、此の場から踏込むのにな。」

俯向いて額を撫で、
「警察へ知らせて、婦の敵を取つて遣らうよ。」
と、着流しの肩さみしく、腕を組んで喟然とする。

音羽がぢつと寄添つて、
「父上、女俳優の其の方は、あの御隠居の言ふことを肯いて殺されたんでせうか。肯かないので殺されたんでせうか、ねえ。」

「馬鹿を言へー！ 知れた事よ．．．柔順に自由に成つたものを殺す奴があるものかな。」

「父上！」
「うむ。」
「私や、私や濟みませんが、其の方が羨し

い！……親子兄弟……五人のためと、
あ、あきらめては居りますけれど、なげりころし 鬪殺にされるよ
り、どんなにづらいか知れませんか。……女に
生れて一生に、男は一人でございますものを。」

と確と乾三の手を取った。乾三は唯震へて居た。

「男は一人でござんすものを、——今日は此
の家に居り侍り——御方様たち、おなぐさみ。

——
と聲が震へて、はつと泣いた。

聞くうちに段々と十手を下げた。其の尖が地につ
く、と父親はうつむいて、八夕と十手を落した。中
腰で両手を上げ、抱くやうにして、音羽の正體もな
く身を任すのを押しつゝ、楹の根に溢れ出た垣に
寄せて立たせたが、蒼白む顔に鬢のおくれ毛、沁入
る月を暗くつゝんで、すつと浮く其の姿は、幽靈に
少しも違はぬ。

墓に跪くやうに、ひたと居て、老朽せる岡引は手

を支いた。・・・

「殺された御婦人、あなたの靈におわびを申す。
あゝ、娘の言ふ通り、俺なぞに、他の罪を發く力はない。・・・成程なぶり殺の方が増だ。・・・音羽、おぬしも堪へてくれ。」

榎の法印は、二年の後に、峨々たる洋館を營んで、靈異なる新薬を鬻ぐ、媚薬だと内々で噂する。葡萄牙牙傳方と稱へて、壇の商標は人面を描いた果實である。行はれること夥しい。

兄は東京へ遁げた。

—— 此の大商館の妻室が音羽である。

【完】